

## 人文系オンライン授業の開発

### —リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性—

井上 亘

要旨：まず本学でオンライン授業が実施された経緯をふりかえり、その内容と実施状況・学習効果・今後希望する形式などについてのアンケート結果をまとめて、それぞれの問題点を指摘し、特に Zoom や Teams 等を利用する「同時双方向型」が演習形式「対話的な学び」に長じている点を確認。そのうえで、現場の教員がまず「対面授業の再現」に取り組んだ経緯をたどる一方、レジュメに貼るハイパーリンクの機能を通じて「博物館や資料館などの施設の活用」および「遺跡や文化財などについての調査活動」を盛り込み、かつ専門家の解説を聞き、辞書を引く「主体的な学び」の案内をも行う「レジュメ：リンク＋解説」方式を紹介して、リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性を探索した。

キーワード：リモート「アクティヴ・ラーニング」 主体的・対話的で深い学び  
オンライン授業 ハイパーリンク 「レジュメ：リンク＋解説」方式

#### ・ はじめに：2020 コロナ・ショック

本年1月16日に国内で初めて感染者が確認された新型コロナウイルス（COVID-19）は、同30日にWHOが「緊急事態」を宣言したあと、翌2月3日に感染者を乗せた豪華客船が横浜港に入ったことを機に関心が高まり、そして同27日に当時の安倍首相が突然、全国の小中高等学校に臨時休校を要請する意向を示したことで、子育て世帯と教育現場は大混乱に陥った。翌3月9日には専門家会議がいわゆる3密回避を呼びかけ、24日にIOCが東京五輪の1年延期を決断、29日にはタレントの志村けんが死去したことで、社会に危機感が広がった。政府は4月7日、7都府県に緊急事態宣言を発出、16日にはこれを全国に拡大し、社会は「自粛」一色となったが、ゴールデンウィーク明けに1日の感染者が100人を下回ると、5月14日に39県、25日には全国で宣言が解除された。翌6月19日に都道府県をまたぐ移動を緩和したところ、7月2日には再び東京都で100人を超える感染者が確認されたが、22日より政府は「GoTo トラベル」キャンペーンを強行、29日には初めて国内の感染者が1000人を超えた<sup>1</sup>。以後、8月初旬の1600人をピークとして<sup>2</sup>、9月現在も未だこの「第2波」のなかにある<sup>3</sup>。

---

1 以上、時系列ニュース：<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/>（2020年9月15日閲覧、以下同）参照。上記のURLをタップするとページが開くはずである（以下同）。

2 国内の発生状況：<https://hazard.yahoo.co.jp/article/20200207> 参照。

3 国立感染症研究所が8月5日に公表した「新型コロナウイルス SARS-CoV-2 のゲノム分子疫学調査2」（<https://www.niid.go.jp/niid/ja/basic-science/467-genome/9787-genome-2020-2.html>；このページの「原文PDF版」参照）によると、1月に確認された武漢のウイルスと2月に持ち込まれたダイヤモンド・プリンセス号のウイルスはすでに「消失」「終息」し、現在「第2波」を起こしているウイルスは3月中旬に「欧州系統の同時多発流入」したものだという。これは政府の水際対策の甘さと感染の封じ込めがあと一歩足りなかった（宣言

このコロナショックに本学がどう対応したかについて、教務部長の安藤雅之教授によると<sup>4</sup>、「遠隔（オンライン）授業などの対応」をいち早く決定する一方、新年度冒頭 3 週間の「ガイダンス期間」を設けて、5 月 11 日よりオンライン授業を全面実施した。「学生の学びと教育の質」の保証を掲げ、通信環境の格差解消などを目的に「特別修学支援金」として一律 5 万円を全学生に支給することを「組織として即断」。結果、教員は授業の負担が増し、学生は課題に追われる悩みはあったが、従来やや一方通行であった対面授業に対し、オンライン授業は「むしろ学生に寄り添う形になった」と総括されている。

しかし「教育の質」については大学から何かトータルな要請がなされたわけではなく、個々の教員に一任（丸投げ）されたというのが、現場の教員の実感であった。本稿では、その取り組みの一例を紹介して、今後の「新常态」における授業のあり方を考えてゆく。

### ・ 1) 本学実施のオンライン授業とその問題点

本学で実施されたオンライン授業は、教科書型・資料配信型・オンデマンド型・同時双方向型の 4 型式であり、それぞれの内容を教務の定義によって紹介すると、

**教科書型**：教科書を中心に行う授業

**資料配信型**：配布された資料を中心に行う授業

**オンデマンド型**：Youtube や Stream 等の動画サイトにある撮影済みの動画を中心に行う授業

**同時双方向型**：Zoom や Teams 等のビデオ会議を利用したライブ配信で行う授業

となる。これらの**実施状況**について学期末に教務がとったアンケートを見ると（一応内部資料なので数字を出すのは控えるが）、教員（非常勤を含む）・学生ともに「資料配信型」が最も多く、以下その半数程度の票数で教員は「教科書型」「同時双方向型」がつづき、学生の回答では「オンデマンド型」「教科書型」がつづく。この食い違いは履修者の多い一般教養の授業などでオンデマンド型が使われたためと解されるが、その**効果**については、教員が「同時双方向型」を圧倒的に支持するのに対して（以下、資料配信型・教科書型・オンデマンド型とつづく）、学生は「資料配信型」が良いという人が圧倒的に多い（但し「悪い」という人も圧倒的に多い）。この結果は同時双方向型が大人数の授業に適さないことを考慮すべきであろうが、聞くとところによると、資料配信型では PDF の資料を読んでコメントするだけの授業や、普段の授業で使っているプリントを教科書を見ながら穴埋めするだけのものも多かったと言い、すると「良い」というのは楽だということで、「悪い」というのは意味がないという意見だと解される。また今後どの型式の授業を**希望**するかについては、「資料配信型」と「オンデマンド型」が上位に立ち、つづいて「同時双方向型」「教科書型」と学生は回答している。なお、**自由回答欄**には学生の不満が渦巻いており、このまま続けたら危ないと教務は警告している。

私が独自に社会専攻の 2・3 年生を対象にとったアンケートでは、ほとんどが**資料配信型**また

---

の解除・移動の緩和が早かった）ことを物語るが、この結果は、「原爆の日」に合わせたかのように公表されたせい、ほとんど知られていないようである。

4 「静岡新聞」2020 年 8 月 12 日朝刊；<https://www.tokoha-u.ac.jp/teacher-news/200819/> 参照。

は**教科書型**で、資料や教科書を読んで毎週レポートを提出するのが苦痛だったと口を揃える。また本学は自宅通学の学生が多いが、6月から順次、対面授業を解禁したことで、大量の課題に追われながら（たった1コマの授業のために）通学する負担を訴える意見も多かった。どうも初等教育課程では、出席をとる意味も含めて毎週レポートを提出させ、しかも質疑応答や講評などのレスポンスをしない教員が多かったらしく、学生たちの不満はほぼその1点に集中しているといっている。

実際このやり方は**通信制高校**よりも劣ると思う。私はかつて通信制高校のスクーリング講師をしていた経験があるが、レポートの課題は細かく添削されたものが返送され、これと対面のスクーリングをセットで行っていた。生徒は引きこもりやいじめなどで全日制を断念した者が多く、学習意欲をもたせることが困難なので、添削や対面での対応が重要な意味をもつ。これと本学の学生を比較するのは不適切かもしれないが、「巣ごもり」状態であることは同様であるから、一期一会とは言わないまでも、適切な対応は必要である。

また私にはレポートを書かせる意味がよくわからない。オンライン授業で問題となるのは学生が内容を理解しているかが「見えない」ことで（これは同時双方向型の16分割画面などでも言えることだろう）、学生に提出物を課すのなら、それは当然、内容の理解度を測るものであるべきだろう。それはレポートである必要がない<sup>6</sup>。

ただ初等教育課程の学生について言えば、おとなりの心理学科などに比べてレポートを書くのが下手なので、強制的に大量のレポートを書かされたことはその訓練にはなると思うが、そういうつもりでレポートを課していたわけでないことは明白であるし、学生も授業の理解度に不安と不満を訴える人が多い。何の説明も意図もないまま、資料や教科書を読ませてレポートを書けでは、何も教えていないと言われてもしかたがない。これでは学費を返せと思われるに決まっている。

一方、アンケートで比較的支持が高かった「**オンデマンド型**」は通常、授業内容を60分程度の動画に収録して動画サイトにアップロードする。この方法について先月、文科大臣がインタビューに答えて「授業の動画がネットで閲覧できると、他大学の授業を見ることもあるでしょう。そうすると、「あの大学のあの先生の授業の方が良い」となり、先生の評価にもつながり、もしかしたら授業のレベルも学生のレベルも、どちらも上がるかもしれません」と話していたのを見て唖然とした<sup>7</sup>。授業の動画化が教育に競争原理を持ち込み教員・学生双方の質向上につながるという新自由主義的な発想はさておき、動画サイト上で授業を共有したら大学が授業料を徴収する根拠を失うだろう。この大臣が昨年末に打ち上げた1人1台端末の「令和の学び」GIGAスク

---

5 その後実施した1年次の必修科目「社会I」のアンケートでも、「同時双方向型」の受講数が多いという以外は、教員どうしが連係して課題の分量を調節してほしいという意見が多数を占めた。

6 例えば拙文：<https://www.tokoha-u.ac.jp/community/telecommunication/20200717/> を読ませて「日本国憲法に「国民統合の象徴」と言う「象徴」とは何か。その「国民統合」が現代に果たす役割を含めて200字以内で答えよ」という問題を出せば、この「象徴」が国体の「機軸」と同義であること、近代の「国民統合」が国民国家＝国体の創出に必要であり、現代では「同調圧力」装置として「自粛」要請を機能させたことを理解しているかわかる（実際これと同様の問題を一般教養の時事問題として出題した）。

7 日経 BP 「【大臣インタビュー】コロナ禍でICT化を加速。ピンチをチャンスに変えて遅れを取り戻す」：<https://project.nikkeibp.co.jp/pc/atcl/19/06/21/00003/082600122/>

ール構想も<sup>8</sup>、学校に誰もいない休校期間に前倒しして一気に教育インフラの敷設をしてしまえば、教育現場はオンライン化へスムーズに移行できたし、地域経済の活性化にもつながったと思うのだが、オンデマンド型は特に容量の大きい動画をダウンロードするので、**通信環境の整備**が前提となる。本学が支援金の支給を即断したのもこの点を配慮したもので、家庭の wifi が使い放題であれば問題ないが、家族割りのスマホで動画を定期的に見るのは難しいだろう。

また**授業動画の善し悪し**は編集技術の高低に左右されやすく、パソコンの操作に明るい教員が作った出来のよい動画に、より多く関心が集まることは避けられない。さらに上記のように授業料の問題があり、大学のホームページ上に学生しか入れない動画共有サイトを立ち上げるべきで、同時に動画編集の助言を行う職員ないし助教を配置すべきであろう。但しどんなにうまく作っても、E テレの高校講座 2 本分の動画を見るのは退屈で、まして素人の編集した 60 分動画を週に何本も視聴するのはもはや苦痛ともなりかねない。やはり学習効果については疑問符がつく方法ではなかろうか。

最後に「**同時双方向型**」について、wifi の不具合でつながらず欠席になったという意見が少なからず見受けられ、上記のオンデマンド型よりも一層、通信環境が一律であることを要する。これが安定的に保証されれば、教員・学生双方にとって**最も負担の少ない方法**と言えるだろう。少し前までは会議用のテレビ電話しかなかったが、最近では画面を切り替えて資料の説明などでもできるようになり、これならオンラインで学会報告などでもできる（実際やり始めている）。但し教師によって Zoom だったり Teams だったり区々なのは不便なので、通信環境の整備とともに使用するソフトも大学で統一すべきである。

もともと会議用のソフトであるから発言がしやすく、質問が出やすい。学生に調べ学習の成果を報告させる演習形式ならば、これはまさに「**主体的・対話的で深い学び**」に最適なツールと言え、確かに**対面授業を駆逐する可能性**をもっている。それは究極には学校という近代的なシステムの価値をも問い直す（したがって教師が今後もなくなる安全な職業でありつづけるとも限らない）。われわれは学校とはなにかを突き詰めて考え、対面特有のスキルというべきものを発揮しないとイケない時代を迎えているのかもしれない。

もう答えが出たようではあるが、この同時双方向型とは違った角度から、学生の主体性を喚起する単純かつ低コストな方法を以下にご紹介しておきたい。それは教育インフラが未整備の過渡的な現段階では一定の意味をもつとも思われるからである。

## ・ 2) リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性

そもそも 5 月にオンライン授業が始まった際、「同時双方向型」の導入はほとんど話題にならず、とにかく学生の通信環境が不安定であるから、なるべく**軽くて良質な教材**を提供するよう指示されたものと記憶している。それでわれわれは、その条件でなるべく完全な形の**授業を再現**することを考えた。それを真っ先に実現されたのが社会専攻の濱川栄教授であった。濱川教授は図版を貼ったパワーポイント (ppt) と要点を書いたレジュメとともに、7 ページ 1 万 2 千字におよぶ講義原稿を配信して「対面授業を再現」された。

まーしかし、「世の中、何が起こるか分からない」ということを理解することが、特に社会

---

8 GIGA スクール構想の実現へ：[https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf) 参照。「GoTo なんとか」とか「GIGA スクール」とか、この軽いネーミングは何とかならないのだろうか。

科を学ぶうえでは非常に大事なことだとも思いますので、このコロナ禍も「一生のうちでできなかった貴重な経験をしているんだ」と前向きに受け止めて、ここから学ぶべきことをしっかり学んでほしいな、などと思っております。

このように先生がそこに立って語りかけるように書かれており、実際すごい再現度だと思った。windows 10 の読み上げソフトを使えば（機械の）声を聞きながら ppt やレジュメを見ることができ、レジュメに a・b・c と 3 つほど穴があいていて、その空欄補充の解答を Microsoft Forms で回収し、同時に出席もとれるという仕組みであった。

この方法はダウンロードの負担が軽く、授業の再現度も高い、開始当初考えられる最も満足度の高いオンライン授業であったと思う。しかし 1 コマの授業に 1 万字以上の原稿を書くのはいかにも教員の負担が重すぎる（実際濱川先生は日に日に疲弊してゆかれた）。

実は私にも似たような経験がある。2008 年夏、それまで天津の南開大学で日本史などを日本語で教えていた私は、北京大学の歴史系で日本古代史（中国の「古代」はアヘン戦争以前を指す）を中国語で教えることになった。

当時私は買い物に困らない程度の中国語しか話せなかった。それが北京大学の看板学科で毎週 100 分の講義を任された。天津に連れてきた妻は日本に帰ってしまった。バツイチのやもめ暮らしでひたすら講義の準備に追われた。100 分の授業には大体 1 万字の中国語の原稿が必要だった。それに 5 割増し程度の日本語の草稿を作り、自力で中国語に訳して（これで大体 1 万字になる）、南開の教え子に中国語を直してもらった。原稿が出来たら今度は四声をチェックして読む練習。そうしてようやく教室に行き、中国語の原稿をそのまま投影してひたすら読み上げた。北京大学の学生は教師が話していても平気で質問してくる。当然なにを言っているのか聞き取れない（特に南方の方言はチンプンカンプンだった）。しかたがないので前に来て黒板に質問を書いてもらって答えた。

私がいた南開や北大だけでなく、中国の大学ではすでにパワーポイントの授業が主流であったが（友人は「日本人の電腦化は遅れている。それはワープロの時代が長かったからだ」と笑っていた）、いくらパネルの授業に慣れているとはいえ、文字だけのパネルでは学生もさすがに寝る。これではいけないと思い直して、日本から持って来た国宝や遺跡の図版をハイパーリンクで開いて見せるようにした。その説明も日本語で書いてから中国語に一々訳した。中国を旅行した人ならわかると思うが、中国にはあまり古いものが残っていない。古くて明代のもので、それ以前の文物になると大体地中から発掘されて博物館に展示されている。だから正倉院宝物のように千年以上も昔のものが、人の手で伝えられてきたと言うと、学生たちは俄然興味を示した。こんなふうに二三年授業をする内に、私もフリーハンドで授業できるようになった。

このようなトラウマをもつ私は、濱川方式の有用性を十分理解しながらも、自分でそれを試みようとは思えなかった。そこで以下のような方式を試してみた。

- ・縄文土器：最古 1 万 6000 年前（青森大平山元 I 遺跡<sup>9</sup>）
- ・縄文文化<sup>10</sup>：三内丸山<sup>11</sup>の生活；竪穴住居<sup>12</sup>…縄文～平安初期 9c

9 <https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/091014/index.html>

10 <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g00766/>

11 <https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/about/door/>

12 <https://sumika.me/contents/11332>

## 人文系オンライン授業の開発 ーリモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性ー

**解説** 縄文時代は縄文土器を用いた時代であり、教科書は1万2000年前からとするが、現在最古の土器は1万6000年前に遡り、今後縄文時代の開始が早まる可能性は高い（本州唯一の旧石器時代人「浜北人<sup>14</sup>」は1万4000年前の女性の骨と性別不明の1万8000年前の骨からなるが、仮に縄文時代が1万5000年前となると女性の方は「縄文人」になってしまう！）。

土器は煮炊きの道具であり、縄文人は竪穴住居に住み、温かい物を食べていた。温かい食べ物はそれだけで生活を豊かにする（コンビニ弁当をチンせず食べるわびしさを想像してほしい）。縄文土器は世界的にも古いもので、次の弥生時代も2300>2500>3000年前と遡りつつあるが、いずれにせよ1万年も続いた縄文時代は「持続可能な社会」を求める世界の学者から注目されている。

※上記の三内丸山遺跡<sup>15</sup>は5500-4000年前と1500年続き、浜松の蜷塚遺跡<sup>16</sup>は4000-3000年前の縄文千年の遺跡で、この2つの遺跡を知れば縄文時代前期から後期にかけての生活をトータルに理解できる。

これは全学共通科目（一般教養）「歴史学」（日本文化史）で実際に配信した「陶磁器と食文化史」の冒頭部分で、2行のレジュメにハイパーリンク（下線部）を貼り、「解説」をつけた。本誌はPDF版で配信される電子版であるから下線部の脚注にあるURLをタップすれば、そのページが開くはずである。

まず「大平山元 I 遺跡」に歴史民俗博物館（歴博）のページをリンクし、1万6千年前の土器の写真と遺跡の復原図を見せる。解説には縄文時代の開始時期が動いていることを述べ、「浜北人」の危機を訴える。この浜北人にもリンクをつけてある。

つづいて「縄文文化」について歴博教授の解説と縄文土器の写真を見せたいうで、三内丸山遺跡の公式ホームページを参照し、当時の食生活を紹介する。さらに「竪穴住居」が縄文一万年をへて9世紀まで使われた秘密の一端を示しつつ、その地べたの暮らしと土器がもたらす温かい食事が、世界史上誇るべき「持続可能な社会」を作り上げていたことを解説する。この地べたの暮らしについては、このあと弥生土器の「高坏」からいまでも旅館に泊まると出てくる「銘々膳」をへて一家団欒の象徴「ちゃぶ台」へとつづくことを指摘し、日本人が長く「椅子の文化」を取り入れなかったことを論じている。

最後に、浜松の学生にはおなじみの蜷塚遺跡が青森の三内丸山につづく「千年遺跡」であることにふれ、暗に浜松市博物館への見学を促している（弥生文化の登呂遺跡も同様に、全国的にも希少な木製器具の宝庫として実地見学を推奨した）。

私は普通の授業でもレジュメにハイパーリンクをつけて図版を見せている（それは北京時代に始めたやり方だが）、その図版は個人的に図録や著書などからスキャンしたもので、拡大して解説するため容量が大きく、オンライン授業では使えない（はじめ共有フォルダに図版を上げて学生に参照させようとしたが、うまくいかなかった）。そこで適切な写真をネット上に求めたわけだが、著作権の問題があるのか、あるいは客足に影響するためか、博物館や美術館の公式ホームページにはなかなかよい写真がない。かといって、個人的に撮影した写真を載せるブログなどは、いい加減なことが書いてあって学生に見せられない（そもそも日本の博物館などは撮影禁止

---

13 <https://sumika.me/contents/11332>

14 <https://www.chunichi.co.jp/article/45055>

15 <https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/materials/publications/leaflet/>

16 <https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamahaku/04smzkap/kouen.html>

のところが多く、そういう写真を掲載したブログも少ない。ちなみに共産主義の中国では「国の宝は人民の宝」であるから、どこでも撮影可能である）。したがってリンクに貼るページ探しに膨大な時間を要した。

また普段の授業ではレジュメを学生に配信しない。これは別の機会に述べたが<sup>17</sup>、学生は中高で「プリント座学」に慣れてきたため、ノートをとる習慣がない。「メモをとらない」という「ゆとり」批判はここに根ざしていると思うが、「人の話を聞くときはメモをとる」習慣を身につけさせると同時に、話の要点はどこかを考え、その内容をあとで再現できるよう記録する訓練はそれじたい「思考・判断・表現」の力を高めるアクティヴな学習法であり、いわゆるラーニング・ピラミッドで講義（座学）の学習定着率が5%とされるのも（このピラミッドじたいが偽物と判明しているが）、ノートをとる作業が抜け落ちているからだと思われる。そういうわけで、わざと普段の授業では、ノートをとらないと講義の内容がなにも残らないようにしている。

一方、歴史を教える時に必要な史料を読ませる場合は、つぎのように工夫した。

### 3) 藤原定家<sup>18</sup>『毎月抄<sup>19</sup>』（1219）：「つづけがら」の芸術理論

また歌の大事は詞の用捨にて侍るべし。（中略）申さば、すべて詞にあしきもなく、よろしきもあるべからず。たゞつづけがらにて歌詞の勝劣侍るべし。

（また歌の大事は詞の用捨にあるでしょう。……申すなら総じて詞に悪い意味も良い意味もあるはずがない。ただ続け方において歌詞の優劣があるのでしょう。）

**解説** 「すべて詞に悪しきもなく、宜しきも有べからず」、つまり言葉に固有の意味などなく、その続け方＝文脈により意味が生じるという。これはなんと、「意味というものは文のレベルで生れる。個々の語単独では、何の意味ももっていない」という、20世紀初頭にソシュール（F. Saussure : 1857-1913）が発見した言語学の法則を7百年も前に先取りしていたことになる（丸山圭三郎『ソシュールを読む』187頁、岩波書店1983年）。

この言語学史上の大発見はひとり定家の手柄ではなく、『古今集<sup>20</sup>』以来三百年にわたり歌詞を突き詰めて考察してきた歌人たちが『新古今集<sup>21</sup>』の時代に到達しえた境地であった。

これは「日本芸術の基礎理論としての歌論の発達」の一部で、「日本のすべての芸術論は、詩歌論に集約される傾向がある」という安田章生の見立てをもとに<sup>22</sup>、『新古今集』の時代の歌論から東山文化の諸芸道論を見通すとともに、「本歌取り」という二次創作技術がその後の日本芸術を基礎づけてゆくことを述べたくだりだが、『毎月抄』は朝日新聞が提供する百科事典のサイト「コトバンク」を参照し、『古今集』『新古今集』はジャパン・ナレッジのページを参照して、固有名詞の知識を押さえるとともに、「定家」については筆跡を見せたかったので、新発見の写本を報じる新聞記事を参照した。

このように苦肉の策で始めた「レジュメ：リンク＋解説」方式であったが、学生たちの反応は

17 拙稿「アクティヴ・ラーニングの現在」（『常葉初等教育研究』第4号2019年）参照。

18 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO50743070Y9A001C1CR8000/>

19 <https://kotobank.jp/word/%E6%AF%8E%E6%9C%88%E6%8A%84-135401>

20 <https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=529>

21 <https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=824>

22 安田章生『日本の芸術論』（東京創元社1972年）4頁。

思いの外よかった（数字は学籍番号上4桁、入学年と学部がこれでわかる）。

- ・1831 初のオンライン授業で不慣れであり、提出が期限ギリギリになってしまったり、うまく考えが書けなかったりしましたが、先生の文章やリンクを読んでいくうちに歴史の見方が身に付いたような気がします。
- ・2011 日本史で学習して知っている言葉もあったが、知らない言葉も沢山できてとても勉強になった。知らない言葉はリンクを見たりして、楽しく学習することができた。
- ・2011 最初はオンラインでの授業に追い付かずリンクされた資料を見て理解していくのに時間がかかり大変でした。しかし、解説をつけて下さったおかげで内容の理解がしやすくなり、スムーズに学習できるようになりました。
- ・2031 歴史学は細かい所まで学べ、自分の知らなかったことも多くありました。解説もあり、リンクもついていたので、時間はかかりましたがアニメや映画の歴史などもあり楽しく受講することができました。
- ・2033 リンクがあったおかげで、分からない部分も理解しやすかったです。

文中「アニメや映画の歴史」は動画をリンクして解説を加え、時計を見ながら読むように注意もしてあったのだが、どうやらリンクを開いて読み進めるやり方が「調べ学習」の効果をもたらして満足度につながったらしい。しかもリンク先は教師の検閲をへた比較的**確かな情報筋**で、ブログにありがちな与太話に紛れ込むこともない。今後なにかを独自に**調べる際の指針**にもなる。なにより**容量が軽い**わりに、**豊富な内容**を盛り込める。

ICTの活用で問題となるのは知識の範囲をどう制限するかである。調べ学習時にネットで検索をかけると、例外的な事物や与太話に近い情報なども引っかかってしまう。これを分別するリテラシーが必要になるが、それを児童生徒に求めるのは無理がある。この点を「GIGA スクール構想」ではどう考えているのか寡聞にして知らないが、本稿で紹介した「レジュメ：リンク＋解説」方式ではこの点の心配がない。しかも調べ学習として「**主体的な学び**」の満足度も得られるとなれば、これは「対話的な学び」に長じた同時双方向型とともに、リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性をもった1つの学びの形として提示できるのではないかと思い、ここにご紹介した次第である。

近年、学習指導要領で「博物館や資料館などの施設の活用」および「遺跡や文化財などについての調査活動」を授業に取り入れ、また「内容に関わる専門家や関係者、関係の諸機関との連携」が明記されて<sup>23</sup>、博物館などは展示やホームページの整備を積極的に進めている。「レジュメ：リンク＋解説」方式はこれらの橋渡しを行うとともに、専門家の解説に耳を傾け、字引で言葉を知る案内をも果たす最も簡易な方法とも言えるだろう。

---

23 『小学校学習指導要領（平成29年告示）』63頁（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』75頁もほぼ同様）、文科省HP：[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm) よりダウンロード可能。